The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	アラン・レネにおける空間 : その記号学的諸相
Author(s)	西岡, 恒男
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/26160
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

〔　題　　名　〕アラン・レネにおける空間 ── その記号学的諸相

学位申請者　　西岡　恒男

アラン・レネ（Alain Resnais, 1922-）は、初期の諸作品とともに〈記憶〉の映画作家として知られるが、近年では〈幻想性〉や〈演劇性〉などのさまざまなテーマに取り組んでいる。彼がそれらのテーマを通して一貫して強調するのは、物語が展開される空間の存在感である。

レネが空間を構成する方法は、時系列的に四つに分けることができる。一つ目は都市論的方法である。初期長編作品では、戦争によって破壊された都市で物語が展開される。『二十四時間の情事』（1959）では、〈断片化されたモンタージュ〉の技法が用いられて、広島という戦後に復興した都市それ自体が強調され、都市はひとりの〈登場人物〉のごとく再構築される。そのとき、災厄を経た都市空間の存在感は登場人物に悪影響を及ぼす。それはレネなりの〈都市論〉と言える。

次に幻想的な方法である。これには〈断片化されたモンタージュ〉を用いたものと、光と影の変化を用いたものがある。前者の場合、『去年マリエンバートで』（1968）や『ジュテーム、ジュテーム』（1968）といった作品では、空間は〈断片化されたモンタージュ〉によってショットごとにランダムに変化する。その結果、空間は現実と非現実が恣意的に繋がったパッチワーク状の構築物になる。そのとき主人公たちは、現実的な空間と想像的な空間とを往復し、迷宮のような想像的空間の中ではとりわけ、オルフェウスの冥界下りさながら死んだ恋人を探し求め、愛の感情を深めていく。しかしながら、登場人物は観客には可視的である背景の変化に気がつかず、空間の不安定さや不気味さが彼／彼女の行動・感情に次第に影響を与え、ときには死に向かわせるのである。

第三に、『死に至る愛』（1984）以降になると〈断片化されたモンタージュ〉は使用されなくなる。今度は、ショットごとに背景が変化するのではなく、俳優の連続的な演技や心理状態に合わせて周囲の光や影が変化するのである。これもまた幻想的な空間構成の方法である。そこには光と影、青い光と赤い光という二極とその反復的提示がある。登場人物たちはこの光と影の戯れには気がつかないが、光と影はやはり存在感をもち、彼らの行動・感情と結びつく。つまり、強烈なスポットライトや赤い光、濃密な暗闇は物語の死の側面と密接な関係をもつ。またそれによって、彼らはうまく行動できずに、亡霊的な様相を示すことになる。レネが関心をもつのは、ミュージカル映画やバンドデシ

ネにおけるような光や色彩の多様性である。結局、強烈な光に包まれるとき、あるいは光が消え背後に濃密な闇が忍び寄るとき、男女は〈死に至る愛〉を交わすのである。

最後に、演劇的な空間構成の方法である。近年の演劇的作品においてレネは、戯曲を忠実に脚色するが、周囲の舞台装置の細部には多彩な変化をつける。その舞台空間はまた、登場人物を閉じ込めてその感情を揺さぶる閉鎖的な空間でもある。一方で舞台空間は、かつて書かれた戯曲を再賦活化する場であり、登場人部の演技に合わせた細部の変化は観劇する観客に愉しみを与える。他方でそれは、登場人物が退出すれば輝きを失った空虚な空間にもなりうる。結局レネは、俳優たちの見事な劇行為の周囲で、登場人物を閉じ込め孤独にさせる空虚な舞台空間の存在感を突出させるのである。

以上の四つの方法を通して、レネ作品における空間は構成される。要するに、空間を構成する諸要素は作品内で二極をもち反復的に提示され、それによって空間は、二極間を揺れ動く不安定な構造物となり、ついには前景化されて存在感をもつに至る。そしてこの揺れ動きは、登場人物の行動や感情に対して、死を前にした逡巡や戸惑いといった影響を及ぼす。さらに周囲のうごめく存在感は、前景にいる登場人物をくぎ付けにし、亡霊のように立ちすくませ、不活発な状態にする。つまり、空間の前景化は、登場人物の不安定さ、居心地の悪さや不安感の描写と密接な関係をもつ。これはレネ作品における根本的なテーマである。空間はそのとき、物語の中でもはや副次的なものではなく、主人公の行動・感情に影響を与え、主人公と同じような地位を占めるに至る。

ところで空間論は、映画分析においてこれまでそれほど取り上げられてこなかった分野である。それは、文学分析をモデルとした映画物語論において、とりわけ語りや語り手の問題に焦点があてられる中で、空間を副次的な分析対象として十分に考慮しなかったからである。しかし、小説はもとより映画においても、空間は意味をなす。つまりレネをはじめとする幾人かの映画作家（エイゼンシュテイン、小津安二郎など）は、観客に対して視覚を通してなんらかの感情を喚起・経験させるために、登場人物を中心とした物語が展開される背後で、空間的な諸要素のネットワークを構成して、空間の前景化を行うのである。

この空間の前景化を読み解く理論的な裏付けとして、映画記号学がひとつの鍵となる。1960 年代にクリスチャン・メッツが創始した映画記号学からは多くの理論的支流が生まれたが、とくに 1980 年代以降に活躍する理論家たちは、メッツの理論における空間論的観点の不十分さを認識していた。実際、初期の映画記号学で問題となった映画作家のひとりは、独特の映画技法を駆使して物語の流れを混乱させるレネであった。しかし、彼の作品には〈追う男／追われる女〉というオルフェウス的主題が一貫して存在しており、そこに複雑さはない。むしろ、われわれを混乱させるのは、空間の変化であると考えるべきである。このように、空間論的な映画記号学を通して見れば、レネ作品の評価は従来とは異なったものになる。結局、われわれが探究すべきは、レネ作品から空間的な要素の数々を取り出し、ありうる諸システムの多様性を構築することにある。その意味では、レネ作品の再検討は、映画記号学の再検討を経由することで可能になったと言える。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　西岡　恒男　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　言語文化研究科教授	木内良行
	副 査　文学研究科准教授	三宅祥雄
	副 査　文学研究科教授	市川明
	副 査　言語文化研究科准教授	高階早苗
	副 査　神戸松蔭女子学院大学教授	打田素之

論文審査の結果の要旨

西岡恒男氏の学位請求論文「アラン・レネにおける空間―その記号学的諸相」は、現代フランスの映画作家アラン・レネ（1922-）の全作品に関して、映画における空間的諸要因の配置と操作によって織り成される各作品の重層的な意味場を、映画記号学の観点から分析しようとするものである。

著者によれば、初期の短編ドキュメンタリー（1950年代）から最新作にいたるレネの全作品は大きく三つのカテゴリーに分類されるという。第一に、アウシュヴィッツや広島といった実在する都市空間の内部探索を物語の中心に据えた「都市論的」映画（「夜と霧」「二十四時間の情事」、「ミュリエル」等）。第二に、ドキュメンタリーのレアリスムとは真っ向から対立し、むしろ非現実的な出来事や非論理的な物語展開がきわだつ「幻想」映画（「去年マリエンバードで」、「ジュテーム、ジュテーム」、「プロビデンス」等）。そして最後に、照明効果・舞台装置・長廻しなど演劇の空間構成法を大胆に採り入れることで、現代映画の新しい方向を模索する「演劇的」映画（「死に至る愛」「メロ」、「スモーキング」、「ノー・スモーキング」等）である。第一期作品群を特徴づける「断片化モンタージュ」の手法は中期の幻想映画においても部分的に踏襲されるが、やがては「光と影」の対比に基づく空間構成に取って代わられ、第三期の演劇的手法が産み出す「全体化され求心化された」空間へと収斂するという。レネの映画は終始「空間」のあり方（画面構成法、場面の連結及び展開の方法、それらの意義等）への考察をその中心軸のひとつとしながら展開されてきたと言うことは確かに可能であるが、先行研究では断片的にしか論じられてこなかった。本論文は、その「空間」のありかたを中心にレネの作品を全体的に考察したところが大きな特徴であり、まず評価すべき点である。

論文各章では先行研究で示されたいくつかの基本概念（「倍音モンタージュ」「ヒョウつなぎ」「光の象徴的／劇的／環境的機能」等）を批判あるいは援用しつつ、主要作品のショット単位、シーン単位の記述と分析が行なわれている。レネの作品のみならず、関連した他の映画作家の作品やさまざまな文献資料をも参照しながら、映画の各場面における空間構成の方法と物語展開との関連性が詳細に論じられており、レネの主要作品のそれぞれの特徴を「空間」のあり方という観点から鮮明に浮き上がらせている。その点においても本論文は評価に値する。

いくつか問題が無いわけではない。各映画の細部の記述にはこだわってはいるものの、同時代の同傾向の他の作家の作品との比較についてはあまり具体的には論じられていない。物語や画面構成の仕方や光や影の象徴的機能等において、どこまでが一般的な映画語法でどこからがレネ個人の感性や考え方によるものなのかという点に関して曖昧なまま残されている部分が少なからずあり、レネの独自性が充分に描き切れていない。また、議論が性急に過ぎる部分がいくつかある。例えば第２章における都市空間がそれ自体で一個の「登場人物」を構成するという主張は興味深いが、「登場人物」自体の定義が曖昧で説得力のある議論になっていない。また、３章のオルフェウス神話との関連性についても過度の一般化による短絡的な議論に終始している。また５章の映画と演劇との比較においては演劇そのものについての知識不足からくる誤解等もいくつか見受けられる。用語の用い方についても、２章の「〈全人称〉を装う視覚」、４章の「フィギュラル」等、概念の説明が漠然としており、それらを用いた議論が曖昧なままで終わってしまうところも少なくない。

しかしながら、そのような欠点はあるものの、本論文がアラン・レネの全作品を対象に「空間」のあり方という視点から論じられた初の本格的な試みであり、主要作品の諸特徴をその視点からある程度浮き上がらせることが出来たという点においては十分に評価できるものであるということで審査委員全員の意見が一致した。

以上のことより、審査員全員は本論文が博士の学位論文に値すると判断した。